

鐘聲夜半録

泉鏡花作

一

石川懸下金澤の巽に方りて、その勝を他國に誇るべき一區の樂地あり。人力、蒼古、幽靜、閑雅、山水、眺望の六を兼ねたりとて、兼六園と名けたるは、元藩主前田家の庭なりしを、今は市民散策の公園と為す。

明治二十七年四月十四日午後十一時家を出で、予は兼六園花月の裡に入れり。箇是風流の為ならず、但寝難き夜の幾分を此處に消却せむと為るに過ぎざれば、予は空しく口八臺に憩ひて時を移せり。四顧寂然、天地沈々として人影無く、花月の全權、清光の香國は、予が掌中に歸したるなり。居ること多時、箇絶清至潔の神境は、寧ろ花月に附與して、予なる臭袋を居くべきにあらざるを曉り、いでや家に歸らむとして、身を起すと與に、側なる掛茶屋の微黯に踞りたる黒影ありて、同時に起つを見たり。

怪むべし、黒影は一個の婦人なり。

片袖を胸にして他をもて半面を掩ひ、少しく頂を垂れつ。年紀尚弱しと覺ゆるに、緩く束ねたる緑髪に些の粧飾も無く、跣に吾妻下駄を履きて、予に先ちて歩みつゝ、傍目も振らず、柳腰嫋々として一直線に進行せり。渠の窄めたる肩の全幅の風采を擧げて没了し、月を浴びたる後姿は、宛然幽靈の迷出でたる如し。尚且其器械的に步行する状は、躬自ら何處に行かむとするを知らざる如く、空中に物ありて怪しき絲を弄びつゝ、渠を導くにあらざるかと疑はるゝばかりなり。

行く／＼婦人は櫻雲南朶の間を穿てり。恰も此時一陣の風起りて、落花は撩亂として其袂に漉げり。

散る花、と見る間に、聯想は予をして太く渠の身上を危はしめたり。此處を過ぎて彼處に到れば、其長さ深さとを以て、百間堀と名づくる一つの忌はしき堀こそあるなれ。

百間堀と謂へば、人は直に身投を想ふ。何となれば、百間堀は舊の金澤城を繞らせるものなるが、古より幾多の入水あり

し外に、曾て著しき歴史のあらざればなり。

夜半渠の如き姿態と氣色とは、最も良く自殺に適せり。予は直ちに、

「貴女身を投げるのではありませんか。」と問はむとせり。斯く謂はゞ、戯るゝに似たらむ。他に人無き時、諧謔以て生面の婦人に三むべからず。或は、

「もし姉様氣を着けておいでなさいよ。」こはまた要らざる御世話なり。予は若年男子の身、老婆にあらずして奚ぞ這般の深切を説くべき。

さりながら、渠が前途は予が家路なりしかば、予は緩歩して婦人に尾せり。歩々心に以為く、渠は蓋し美ならむ。未だ其容貌を覷ずと雖も、風骨の自から匹婦にあらざるを知れり。

予も無言渠も無言、夜は彌々寂として、萬有盡く熟睡せり。冴えて響くは互の跽音、絶えず歩を進めて公園を出づれば、百間堀は間近になりぬ。

堀の彼方に高き石垣と、一帶の墻壁ありて、金澤城の名残を留む。櫓の巍然として月下に聳ゆる邊は、往時二の丸の跡、今は名古屋鎮臺に屬せる兵營なり。

此處に到るまで婦人は一度も顧ざりき。されども高く響く跽音を聞きて、渠は己に尾する者あるを知らむ。己に死を欲するからは、傍に人あるを憚るべし。いかなる場合にても、人の岸に臨むを見て袖手傍觀するものあらむや。快く身を投げむと欲せば、先づ予を避けて、然る後に為ざるべからず。

さればにや婦人は堀の外柵に沿ひて歩みつゝ、毫末もさる素振を見せで、恰も所用ありて通行する者の如く擬しつゝ、故と堀の岸を離れて、紺屋坂といふを下らむとせり。

此時雷の如き聲あり、呵して、

「誰だ！」と呼べり。

婦人は太く驚きたる風情にて、轉ぶが如く坂を下ると見えしが、忽ち曲角に見えずなりけり。不意の事に吃驚して、

予は思はず立停りぬ。

其聲は再び、

「誰だ！」と誰何せり。

これ兵營の番卒が深夜の通行を詰るなりけり。恚る時は其聲に應じて、告ぐるに我名を以てすれば、別に仔細のあらざるを知るにぞ、予は速に答へける。

町 番地豊島亮助。

果して何等の反問をもせざりき。前途を望めば杳として影なし。婦人は何方へか行きけむ、坂の彼方の町に、犬の鳴聲頻に聞えたり。

予は紺屋坂を下りぬ。此處に地方裁判所、金澤監獄署等二三の巨大なる建物あり。板塀土塀限無く連りて、人里遠く、殊に今の監獄署は舊公事場の址にして、當時手痛き拷問に叫喚の悲鳴は常に道路に漏れしかば、人は忌みて、此界限を往來せざりし遺風今に存して、深夜の光景、人ある世とも覺えぬまでに、いと物凄く、月のみ獨り牙互れり。

嚮より予は婦人の事におもひを馳せて時の鐘をも聞洩せしが、はや一時にも垂んとすらむ。監獄署の前を過ぎて遙に一方の街衢の盡頭を望めば、其處に兩個の人影ありて頻に三見るが見えたり。四隣静なれば其聲も聞えつ。

「まあさ、お待ちなさいッてば。」

力を籠めたる聲音なり。他は苛ちたる音調にて、

「いゝえ、お放しなすつて、否。」

振切らむとするを引止めて遣らじ、行かむと争ふ體なり。

予の歩を疾めて間近になれる聲音にや驚きけむ、二人は解れて左右に別るゝ咄嗟に、予は渠等の容貌を見たり。一人は走りぬ、一人は追ひぬ。

先刻に公園にて予が尾せし間は、徹頭徹尾其の後姿を見たりしのみなれば、更に心も着かざりしが、此時瞥と窺ひし眞白き面、紅き唇、涼しき眼、此予が豫て知れる面影なり。且今渠と争ひたりし他の婦人にも、亦一面の識なきにあらざるなり。予が始めて渠等を見しは、前の日曜なりき。其日花曇の空覺束なかりしを事ともせで、公園に櫻を見てし歸途、雨に逢ひて人の軒端に三を避けたりしに、また後より同一所に駈込みて、雨宿りせし婦人ありき。予が一面の識ありといふ他の一人は即ち是なり。

久しく晴間を待ちしかど、雨はます／＼繁くして、俄に歇むべくも見えざりしかば、こは如何にせむなど語合ひけるに、格子戸の内に優しき聲して、

「嗚御困りでございます。未だ急に歇みさうもございませんから、一本しかございませんで、番傘ですが宜くばお持ち

なさいまし。」

とて傘を貸せし美人こそ、今夜入水するにあらざるやを疑ひつゝある婦人なりけれ。

其時予は門札を見て、吉倉とい、ふ姓を知りぬ。

家には唯父と女とのみ。女は名を幸といひて年紀十九なり。

押繪刺繍など細工物の上手にて、金澤なる高等女子授産館の職工頭を務め、月若干の収入をもて父を養ひ、事へて

至孝貞淑の娘なるよし、後日人傳に聞きけるなり。

其日は黄昏なりしかば、一張の傘に男女二人を容れて、往來に憚りあらず、予は彼の雨宿りせし婦人と、もに歸途に就け

り。順路半して別に際し、婦人は一葉の名刺を與へき。記して近藤定子といふ。

「安息日にはちと御出懸遊ばせな、之を御縁に。」

と挨拶して、渠は唯有る西洋館の内に入りけり。定子は基督教の宣教師外人ハレスの家に寓して、私立北陸女子英學院の

教師なりと、同伴になれりし間に渠自から語りき。予は其然るを信ぜり。渠は言語、風俗凡て純然たる女教師なりき。

其翌日傘を返さむとて赴きしに、女教師も亦厚意を謝せむがために先に先だちて吉倉を見舞ひたりしが、女同志の早くも

打解けて、親しき友の如く語合ひたり。幸が休息を勧めしも、はた定子が同伴を強ひしも、只管辭して其日は歸りぬ。爾來

幸は予が意中の人となれり。予は片時も渠を忘るゝ能はざりき。

一日予は國許よりの為換金若干圓を郵便局より請取りて、友人の家に半日を消し、夜に入りて下宿に歸る路、期せずして

吉倉の屋敷を過ぎき。小柴垣を隔てゝ、幾ほども無き庭の彼方に、燈火の影障子に映して、奥と覺ゆる方にて、乾びたる聲

と、媚ける聲との物語るが聞えたり。予は聞くとも無く行みぬ。

時に差俯きたる婦人の影法師は面を擡げたり。

「何しませうね、父様。」

力無げに太息吐けば、

「さればの、家を抵當とい次第にも行かず。目ぼしい代物は、皆もう疾くに失くなしたし。誠にはや何とも為様が無い。

僅五圓そこの金子に、詰れば斯うも詰るものか。私も足腰は立つ身で居ながら、お前に養はれて、始終苦勞を懸けるといふは、あゝ面目無い、親効も無い。」圓き頭は悄然として低れたり。銀返の影は動きて、

「飛んだことをおつしやいます。私に甲斐性がございませぬから、何時も御心配を懸けてばかり。今度も折悪く半月餘仕事を休んで、ぶら／＼病氣で居ましたので、こんな手詰になりしました。御年寄に飛んだ御苦勞をさせまして。」

予は思はず憐愍を催して、懷中を探れば、間に合ふ程の金員あり。進んで用達てむと表に回り、あはや案内を乞はむとせしが、聳然として思返せり。これ金子を以て婦人の愛を購ふなり。劣奴、何の所為ぞと。さりながら心は少時麻の如く亂れしが、遂に一葉の五圓紙幣を寸断し去りて、道路に棄て、敢て、人に貸すに吝ならざるを誓ひて、少しく心を安んじけり。什麼生狂か癡か。我自から知らざりき。

愆くて予は冷然として去らむとせし時、前途より來れる一個の女と無端面を合せぬ。

「おや豊島様　　ぢやありませんか。」

予も聲を合せて、

「えゝ近藤様。」

女教師近藤定子の今宵も幸を訪はむとて來れるに逢へりしなり。

予は其後の事を今夜に到るまで知らざるなり。日を経て、今や再會せるが、咄嗟の際、言を懸くるに違あらず、走れる美人は幸にして、追へる婦人は定子なり。

幸が走りし方角に淺野川といふなる大河あり。以為らく、渠は間接に予が為に妨げられ、百間堀にて、志を果し得ず、死地を替へて流に赴きしものならむと、因りて間道より淺野川に急げる路、蕎麥屋と按摩との立話を聞けり。

「今しがた美しい女が取亂して駈けてツたらうね。」

と按摩が道へば、蕎麥屋は頷き、

「あい、何うも様子が變だつた。荷が無ければ追懸けたい位でしたよ。お前様美しい女なんて、何うして解るえ。」

「暗の夜で御覽じろ。此方人等が目明の手を曳いて遣るやつさ。女的美醜なんざ、聲音で解ります。」

「ふうむ、なるほど。」

按摩は得意に、

「何も突詰めて居たらしいが、明日は大方新聞だ。」

「理由は屹とお胎だね。」

「何だか知れたもんぢや無い。」

「其處まで見えるのが目明のお蔭さ。」

「はい、此奴は遣られた。」

と渠等は大笑して別れぬ。

聞けば氣になる婦人の噂、急げば程なく河畔に着きぬ。滔々一條の銀蛇脚下に流れて、對岸なる山の麓に抵る。近き柳は刷けるが如く、遠き松 柏は染めたる如し。凄腕たる月影、水色、此景、此時、恰も身を投ぐるに可矣。果せる哉、水邊に

人あり、流に面して物淋しげにイめり。

予は其風體を觀るに違あらず、馳せて危急に赴けり。さりながら救はむとせる予は却りて渠に死を促せり。渠は身を躍らして水に入らむとせしが、逸早く予が手に羽織の袖を捉へられて、志を果さざりき。

身を悶えて、

「後生です、お放しなすつて。」

其聲は予が意中の人にあらず。されども事茲に及ぶ、誰か越人と秦人とを問はむや。力を籠めて、

「お待ちなさい。ともかくも譯を聞かうぢやありませんか。否無理にお止め申さないんだ。」

取りたる袖を引戻して、漸く汀を遠ざけたり。此時婦人は予の顔を見て、

「おや、貴下は。」

と驚けり。予もまた驚けり。

「や、お前様も身を投げるのですか。」

想はざりき近藤定子ならむとは。定子は愁然として首を低れ、

「唯、死なゞけりやならないことがございます。其理由を申したら、一旦御助け下さつた貴下でも、それぢや死ねとおつ

しやるでせう。」

其聲常を失はず。狂せるにはあらざるべし。予は問ひぬ。

「何ういふ次第で。」

女教師は語確に、

「私 は間 接にあのお幸さんを殺しました。」

「何？」

渠は徐に語り出せり。

「私の 寄食するハレスといふ宣教師が、貴下、此度國許の友達へ日本の國産を送らうツて、種々な物を調べました處

が、御存じの通り金澤には「はんけち」の刺繍が盛んでございませう。で、其をも土産の中へ加へようと申すのですが、ハレスの目的では、尋常の刺繍では珍しくない。一層あの何に、實に賣下怪しからぬ繪をね、刺繍にしたら、きつと大當だらうといふので、金子は幾干でも出す、價値には構はないからツて、私に其周旋を命じました。

今となつては面目無うございませうが、種々世話になつてをります教師のことゆゑ、兎も角も請合ひまして、其仕事をするものはあるまいかと探してをりました矢先、過日の雨宿が御縁となつて、賣下にも御目に懸り、またお幸様とお知己になつて見ますと、押繪や刺繍はあの方の本職でせう。これは好い人を見つけたと思ひまして、それから精々と參つて、しばらくの間は大層懇意になりました。

實際つて見ますと、極内氣な、おとなしい方だから、さすがに憚つて其様な註文は言出し悪く、猶豫つてをりましたが、此間それお幸様の門で、一寸お目に懸つたことがございましたね、あの晩でした、とう／＼無理にお頼み申したのですが、そんな穢らはしい註文は受けるやうな方ではなかつたのですが、何だか御金子にお逼へなすつた様で、私もそこへ乗んで、あの御父上には内證にして、説着けたんです。

出來て參つたのは今月の十日の日でした。申分なく仕上つて、ハレスも大喜でございました。すると何うして知れたものか、其事が新聞に出たのです。賣下もきつと御存じでせう。尤も私等の姓名は明記してはございませんでしたが、暗にそれと諷する様に、非常に攻撃をしたもんですから、お幸様も堪らなくおなんなすつたと見えて、今晚ハレスの家に私を尋ねてお出になつて、おつしやるには、「實に私には悪い事をいたしました。何かあの事が國辱とやらになるのださうで、人様に顔向けもならず、政府へ對しても申譯がなくなつて、居ても立つても居られませんが、何ぞ刺繍をした「はんけち」はお返しを願ひたうございませう。」ツて、作料を返すために、頭のものから一枚の曠着まで、お金子にして持つて入らつたので、私もお氣の毒になりましてね、二人でハレスに逢つて、當らず、障らず、「先達ての刺繍には些と手落がございませうから、折角の御誂に粗相があつては氣が濟みませんから、一寸お貸し下さいませう。」と謂つたのですが、あのまた邪智深いハレスが何肯きませう。仕舞には、「え、執拗い婦人だ」ツて、まあ非道いことを、お幸様の乳の下を上靴で蹴つて、ふいと椅子を立ちました。

お幸様の御心は何なでございましたらう。私 も面が憎いやら、口惜いやら、お幸様は蒼くなつてお歸んなさる。私
はまた何うぞして「はんけち」を取出して、其を返して御謝罪をしようと思ひまして、後でハレスに談じますと、
「汝日本の鼻屑をする、そんな者はもう世話は出来ぬ」と其場で私 を追出して、自分は夫婦連で何處かの夜會へ出懸け
ました。

私 は外へ出て茫乎彼方此方を彷徨てをりますうち、先刻料らず紺屋坂の下でお幸さんに逢ひましたので、「まあ貴女」と
聲を懸けると、返事もしらずに駈出して去らつしやる様子が變でしたから、驚いて止めるのを、振切つて行かうとなさる。
争つて居ります間に、お幸様の懐から一通の文が私 の手に落ちました。さうかうする内見失つて、後で其文を見ると、
貴下書置でせう、父上様にお宛なすつた。さあ大變と思ひましたが、よく／＼考へて見ますれば、皆私 の罪なので、
ですから死ななければなりません。えゝ貴下、ですから何ぞお止め下さいませな。」

女教師は聲を濕まして、

「しかし思懸なく貴下にお目に懸つたのは 幸 です。此書置の中には、豊島様、貴下の事が書いてございますよ。 憚り
ですがお幸様の父様に届けて上げて下さい。これは何卒お幸様の為に頼まれて下さいまし。」

斯くて定子は、終始黙然として腕を拱きたる予が臂の上に、一通の書状を載せたり。予は受けむとせで、瞑目して仍
黙せり。予は實に謂はむと欲する處を知らざりしなり。

やがて定子は靜に歩を運びて、再び水に赴く氣勢なり。予はいかむともなすこと能はず、聞くが如くんば女教師は死す
も可なり。斯る事情を聞きても、尚彼が死を留むる如き仁者は、予のかはりに此處に齎らさざりしは、或は天公渠に死
罪を命じて活かさざらむことを欲せるならむか。一方より觀れば、彼は甚だ不幸なるべし。然りといへども妨害を受けずし
て、潔く死を逐ぐるは決死の人の本意ならずや。

發矢！ 忽ち裂帛の音すれば、水面破れて婦人は没せり。予が眼を覗きたるは、其眞白き手の纒に水上に露るゝ時なりき。
泡沫飛散して影は瞬時に消えたり。下流遙に月の隈あるを見る。

予は低 徊して去りぬ。

「ちよいと、豊島様。」

斯呼ばれて心着けば、予は今莊麗なる西洋館の門を過ぎむとせるなり。此時にいたるまで、何處をいかにして此處に來り
しや、我自身之を知らず。呼ぶは誰ぞ。幸なり。予は其 幻にあらざるかを怪みぬ。既に死したりと思へりしに、突然渠
に呼留められたる予が驚駭はそも幾許ぞ。されど其語るを聞きて萬事を解せり。

幸は前に監獄署の 傍 にて、定子を避けて再び百間堀に引返せしに、こたびは尾して妨ぐる者なかりしかば、直ちに水

に臨みし時、予が定子に於てせる如く、爾く彼を抱留めたる一個剛骨の健兒ありき。其は篠原勘六と名乗る猛者なるが、
×町の道場に劍を學ひて歸るの途次、料らずも此處に會して、幸が最期を延べたるなり。

切に篠原の問ふに應じて、幸は其情實を説きけるに、勘六は腕を扼して赤髯奴の亡状を憤慨し、手なる日本杖を撫して誓ひける。

「可し、其「はんけち」は我が屹と取つて遣る。何、心配するに及ばん。」

と懇に其死を留めつ。漸く渠を肯せしめしが、なほ心許なければとて、深切にも幸を家に護返せり。然るに路ハレスの門前を過ぐる時、偶會ハレス等夫婦の夜會より家に歸るに遇へり。

見るより勘六はちつとも堪へず、直ちにハレスに立向ひて、厲聲叱咤二三語詈りけるに、ハレスは杖以て篠原を揮斥け、つと門内に入りけるより、勘六も續きて内に入れば、引違ひて馬丁體の壮佼出來りて、はたと門扉を鎖してけり。

幸は恚く語りて、其後の事を知るに由なし。渠は篠原の消息を待ちて獨り門前に行みたるが、予の通合せたるを見て、呼留めたるにぞありける。

始終を聞きて、予は懸念に堪へず、

「では其篠原とかいふ人は此家へ入つて居るんですね。」

幸は慮はしげに答へぬ。

「え、闐として物音も聞えませんが、如何遊ばしたのでございませうね。」

忽爾三層樓の一室内に、物凄まじき響あり。玻璃窓を打破きて、雷の如き聲を發し、

「毛唐、何だつて人を推込めた。戸を開ける。汝、打破すぞ。」

と呼ぶが聞ゆ。惟ふにハレス等は篠原を禁錮して出づるを得ざらしめたるならむ。

果して篠原は今打破りたる玻璃窓より、憤怒の朱を沃げる面を出して、屹と四方を望む血相、將に危きを顧みて、飛下り

むずと見えたれば、予は「呀と聲を懸けたり。」

「失敬、待ツた／＼。今に何かする。君急ぎ給ふな。」

苛ちに苛てる勘六が耳には、予の聲の入らざりけむ、衝と半身を乗出し、仕込杖を脇挟みて、兩脛を揃へたりと見る間に、

十間に餘れる三層樓の窓より、流星の如く落下れり。門内に「と地響きして、呀と叫ぶ聲！ 渠は身體に傷つけたらむ。予

は我知らず力の限り門扉を打敲きて、

「開ける／＼。」

時に雑然と登音して、多人數内より出でたる様子なり。篠原は血聲を絞りて、

「此奴等、うぬ。」

門内俄に物騒がしく、姑くして英語を囀るはハレスならむ。

「なに恐れる事は無い、此奴三階から飛下りて脛を折いたさうだ。態を見る。それ／＼腰が立たぬわ。命知らずの大馬鹿者め。アハ、／＼、／＼、／＼。」

と高笑す。續きて篠原が苦悶の聲を發するは、寄集りて苛むならむ。幸は予が袖を斷れむばかりに牽動かし、
「貴下如何かして上げて下さいまし。あれ又あゝ、あれ／＼皆で酷い目に逢せる様です。私 はもう如何いたしませう。」

と狂亂して應援を促がせども、鴻門固く鎖したるに樊二が腕のあらざるを如何にせむ。破るゝばかりに音信れて、
「こら！兄弟を何とする、開けぬか／＼。」

と呼ばゝるのみ、何等の計もあらざりき。稍ありて門の片扉は裡より開けり。得たりと突入る出合頭、馬丁と庖人は兩手を取りて、血塗なる篠原を突出し、同時に犇と門を鎖して、

「野蠻人め、ハレス様を何だと思ふ。」
と口を揃へて嘲笑せり。

篠原は刀を杖に血眼を赫とニき、取絶る幸を見て、いと苦しげに呻出せり。

「姉や、頼まれ効も無い、勘辨せい、無、無念だ。」

と謂ひもあへず、手にせる刀を把直して、刹那に腹に突立てたり。

驚く幸を押退けて、予は其腕を抑へしかど、はや一文字に引廻して、怒れる形相鬼神の如く、姿は生きて已に死せり。

予は茫然自ら化して石となれるもの一分時、幸が駈出るに心着き、追絶りて袂を捉へ、

「これ貴女如何なさる。」

幸は涙を飲んで、

「たとひ「はんけち」が戻りまして、もう生きては居られませぬ。見ず知らずの篠原様が私 の為に。」

といへるにぞ、予は實に其死の己むを得ざるを知りて、萬物を賭するも、之を留むべき口實なし。予は我ながら怪しげなる聲を出して、

「近藤から託つて、貴下の書置は私が持つて居ます。」
と聞くより渠は蒼白き顔を颯と赧めたり。

「え、あれをお読みなすつたの。」

「否、人の信書は濫に見ません。此まゝ父上へ届けてあげます。」

幸は漸く心を安んじて、

「私が死なゝい前に、決して見ては下さいますなよ。」

予は誓ふが如く、

「よろしい。」

慙く言ひつゝ互に顔を見合せたり。

眼と眼と相會へる時渠は面を背けたり。予は口吃して語るを得ず。

時は渠に死を促せり。幸は忽ち見えなくなりぬ。仰ぎて天を望めば月色暗く、俯して地に對すれば、鬼氣人を吹いて陰々たり。

讀者如他日予が死を聞かれなば、直ちにハレスが存亡を問はれよ。同月同日同所に於て、醜虜も同時に死すべきなり。

【完】

